トライルブレイザー　AC（Another Century）！

MABOROZUKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トライルブレイザー　ＡＣ（Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｃｅｎｔｕｒｙ）！

【Ｎコード】
Ｎ６９９４Ｑ

【作者名】
ＭＡＢＯＲＯＺＵＫＩ

【あらすじ】
人類が他惑星移住を始めて数百年、とある移民船団が地球の１０倍もある惑星ドラゴに到着。そこにすむ先住の知的生命体通称ドラゴンとコンタクトを果たす。ドラゴンたちは穏やかで、暖かく人類を受け入れた。ところが、ドラゴンの骨からレアメタル、ドラゴニウムが発見されると、その多様性と希少から値段が沸騰、お金目的でドラゴンの密漁を始める人々が急増。それに怒ったドラゴン達」は人類に対して全面戦争を宣誓。人類もそれに対して応戦、大戦は約３０年位で終結。自らの過ちを反省した人類はドラゴンと友好条

約を結び惑星中央はドラゴニウムの流通が厳密に管理され、密漁はなくなり、ドラゴンと人類はまた手を取り合って歩み始めた。
物語はそれから３００年後。辺境で修理屋として生きる少年ジークの物語

ボーイ　ミーツ　ガール（前書き）

トライルブレイザー！から３００年後の世界のお話です。
辺境の地で修理屋として生きる少年ジークの物語です。

ボーイ　ミーツ　ガール

「ジーク、５番のレンチを取ってくれ」
足元からぬっと手が出てきた。
「あいよ、」
腰に巻いた革の用具ベルトからすっとレンチを抜き取ると、ジークは油と汚れにくすんだ作業手袋にしっかりそれを渡した。
「あんがとよ」
車体の下に引っ込んでいく手を見送って、ジークは自分のやりかけの作業に戻る。
作業に熱中するその横顔は１５歳の幼さを残しつつ強い意志が感じられた。
最後のネジを締めふたを閉じた。
カチコチカチコチ
「よし！。」
拡大ゴーグルを額のほうに押しやり疲れた目をほぐしながらうーんと背伸びをした。
「ついでに時間も合わせよっかな」
カーン、コーン、カーン
時計を見ると丁度１２時で、作業場として設けられたこの倉庫にも鐘の音が鳴り響いた。
「よっこらせっと、もうお昼か・・・」
そういいながら、トラックの下からさっきの手の主が這い出してきた。
「ボルトがずいぶん腐食しててな、交換にずいぶん手間取った。」
ゴーグルを外して、最近増えてきたと愚痴っていた白髪交じりの頭をかきながら、椅子にかけてあったタオルで汗を拭く。そしてテーブルの上のコップに水差しから水を注いで一気に飲み干した。髪とは対照的にに鍛え上げたれた上半体は生命力にあふれ、歳を感じさ

せない。名前はディル。ジークの祖父にして辺境一の修理屋である。
ディルは一息つくと、テーブルの周りにはジークが修理したであろうテレビやラジオを一つ一つ簡単ではあるがチェックしていった。
「ジーク、お前も結構腕を上げたな。前までは一つ仕上げるのに半日は掛かったのにな、」
「へへへ」
珍しくほめられてジークは鼻面をこすりながら照れた。
「ディル様、ジーク、お昼の用意ができました」
すると、二人のマイクホンから女性の声が流れた。
「了解、マリア。すぐ行く」
「おい、ジーク、さっさと昼飯を済ませるぞ、午後も仕事はあるからな」
ディルはジークに呼びかけると先に倉庫を後にする。
「わかったよ。」
道具をしまい終わったジークは子走りにディルの後を追った。
ジークが倉の裏手に回ると、そこにはジークたちの移動兼住居の大型トラックがあった。

人類がこの星に到着して７００年、ドラゴンに似た知的生命体がすむこの惑星ドラコは地球の１０倍の大きさがある。いまだ１００分の一くらいしかその全容がわかっていないという開拓真っ盛りの中で、ジーク達二人はトラックに乗って辺境の開拓村、フロンティアコロニーを巡回し、機械などの修理をしながら生計を立てていた。使えるものは使えなくなるまで、そして使えなくなってたらバラ（解体）してリサイクル。壊れたら新しいものを買えばいいという宇宙開拓史以前の感覚はこの未開の惑星では通用しない。今回も、とあるコロニーの村長に依頼され、村から集められたものを修理、もしくは解体しに来たのだった。
トラック脇に設置された日よけのパラソルにジークは駆け寄った。

テーブル上のお皿には程よく焦げ目の付いた厚切りパンにたっぷりの野菜とそれにも負けないくらいはみ出た分厚い肉がはさまれているサンド、横には湯気の立ち上るスープの入ったマグカップがおかれていた。
ぐぐぅぅう
育ち盛りの腹が景気良くなった。
「ジーク、そこに水道があるからしっかり手を洗えよ？」
手を拭きながらディルが椅子に座る。
「あっ、わすれてた」
作業を終えた手に目をやるとはグリスやサビで汚れていた。
ジャー　ばしゃばしゃ
水道をひねり水を出して手をぬらしながら下に結ばれた石鹸の入ったネットを手でよく揉んで泡を立てる。手洗いが終わると、ついでにうがいと、顔を洗った。

ふぅー

見上げると雲ひとつない青い空が広がっていた。両手を広げて目を閉じると倉庫の屋根にとまった小鳥の声も聞こえる。
コー・・・
上空からエンジン音とともに巨大な影がジークを包んだ。
目を開けると３つの丈１２~ ３ｍはあろう巨人が通り過ぎていくところだった。
「あれは、トライルブレイザーだ。しかも、あの肩のエンブレムは・・・惑星中央政府軍が来るなんて、なにがあったのか？」
腰には両刃の剣を携え、右手にライフル銃を持った白と青を基調としたどこか甲冑を思わせるようなボディをしたトライルブレイザー通称ＴＢと呼ばれる人型機械は背中の羽に似たウイングを展開してジークの上を通り過ぎていった。

いまだ未開拓なこの惑星は総面積がはるかに広く、生物が多様で、人畜に被害を及ぼす生物も多い。大体はハンターと呼ばれる、それら危険生物を駆逐することを専門とした人々に、ギルドを通してコロニーが依頼する。それでも対処しきれないときは惑星中央政府に依頼する。惑星中央政府とは、この星の人類圏の中核をなし、人類がこの惑星に到着してから７００年の歴史を誇る組織である。もちろん開拓を推奨する惑星中央政府は協力を惜しむことはない。特に未開の辺境の地では何が起こってもおかしくはなく、コロニーが危険生物によって壊滅に追い込まれたということはさほど珍しくはなかった。

「惑星中央政府軍が来ているのか。何かあったのかな？」

ぐぐぐぅ～

腹がけたたましくなった。

「ま、俺には関係ないか！」

さっさとしないと昼ごはんを食べる時間がなくなってしまうとジークは急いで引き返したのだった。

ジークが戻るとディルはすでに食事を終えマリアに食後のコーヒーを注いでもらっていた。

「じいちゃん、もう食ったのかよ、早すぎだって」

「うん？早寝、早食い、早糞は３ドランの特ってな、昔から言うんだぞ。」

コーヒーをすするディルの言葉にあきれながら、ジークはサンドにかじりつく。

しゃきしゃきとした野菜の歯ごたえとともにじゅわっと肉汁が口いっぱいに広がり特性の甘酸っぱいソースがさわやかに混ざり合い舌を転がる。

「うまい、美味しいよ、マリ姉」

「あらまぁ、ジークありがとう。ところでスープがずいぶんさめて

しまったわ、あたためなおしたほうがいいかしら？」
おっとりとした言葉使いとともにスーとジークの隣に来たマリ姉ことマリアは人ではなかった。人と同じくらいの大きさでアンドロイドとよばれるロボットである。丸い流線を帯びたボディと発音器から発せられる声からも女性アンドロイドであるということがわかる。顔はなんとなく目と鼻がわかるくらいの凹凸があり、頭部にはお下げを模した耳のようなものが左右についている。移動は反重力という技術を利用しているため足がない。
「いいよ、猫舌だからこれくらいが丁度いい」
「ははは、それじゃ早食いはむりだな、2ドランしか得できんぞ？」
マリアにおかわりのコーヒーを注いでもらいながらディルが笑う。
「そういえば、レイ姉とソフィ姉は？」
「う～んと、レイは反対側で洗濯をしていますわ。ソフィアは午後の修理品の配達のために中でお食事中（充電中）たったかしら」
レイとソフィアもマリアと同じアンドロイドでしゃべり方とボディカラーそしてアイライトの色が違うだけで、外見は同じのである。レイはオレンジ、ソフィアはピンク、マリアはブルーである。3体はマリアを長女として次女のレイ、三女のソフィアの3姉妹で、ジークの姉的存在でもある。
「そっか、そういえば午後はなにをするんだっけ？」
「どうやらこないだの嵐で電波塔のアンテナが吹っ飛んだらしい。位置も高いしライデンを使うから用意を頼む」
「わかった！　そういえば、さっき中央軍のＴＢが飛んでいったけど、見た？」
「おう、あれはソードタイプだな、えらく物騒だが、中央軍がきているなら大丈夫だとは思う、あとで村長に聞いておく。」
そして一時間後だと付け加えると、ディルは顔にタオルをかけて椅子にもたれかかる。昼寝をするという合図だ。
「ご馳走様でした。」

マリアが入れてくれたコーヒーを飲み干し、ジークは立ち上がる。
「さて、ライデンとこにいくかな」
マリアが食器類をかたづけ始めたので、席を立ち、ホバーの後部に向かう。ジークたちのトラックは大型で、運転部と居住区と荷台の３つに別れている。居住区はシャワーとトイレと2人分のベットがあるくらいの狭いものである。ジークはそれよりも大きい最後尾の荷台に向かった。
「ジーク、お昼はおわったの？」
うしろから声をかけてきたのはレイだった。荷台と近くの木に糸を張って丁寧に伸ばしながら洗濯物をほしている。
「あ、レイ姉、今食べたところだよ、ところで、これからライデンを起動させるんだけど、いいかな？」
「それならこっちの糸をあっちに移すから待って、まったくこのままだったらせっかくの洗濯物が汚れちゃう」
文句を言いながら荷台に結んでいた糸を洗濯物が地面につかないように器用に持ち、もう一本の木の枝に結ぶ。
「レイ姉、サンキュー！」
荷台に上りかかっているホロをはがす。するとその下からはＴＢが現れた。さっき上空を飛んでいたＴＢにどこか似ていたが、シンプルで武器も付いていない。３００年前の大戦時、これで辺境の怪物と渡り合っていたらしいが、今となっては型も相当古く、ところどころ凹んだ表面とサビたボディからは見る影もない。ジークたちはこのＴＢライデンを運搬や作業用として使っている。
コクピットにたどり着くとハッチを開くためにジークは開閉のボタンを押した。
「ぽちっと、あれ？開かない。故障か？まいったなぁ」
バリバリと頭をかきながらハッチを点検する。
「う～ん・・・」
じっくり見て周ると、ハッチが少し開いているのに気がついた。
「あれ？開いてる、前閉めたときに小石でもはさまったかなぁ・・・

・夕べすごい砂嵐だったからシートが砂まみれだったら　じぃちゃんに怒られるぞ。」
仕方なく手動開閉用レバーに手をかけてハッチを開く。
ガコォーン
「う～見たくない」
砂まみれのコクピットを思い浮かべながら恐る恐るハッチを開けた。
そしてジークの瞳に飛び込んできたのは、砂まみれのコクピットではなく、少女だった。

すぅすぅすぅ・・・・

歳はジークと同じくらいだろうか、大人びた感じもあったが無防備に眠るその寝顔にはまだ幼さが残っている。
今まで寄ったコロニーで出会ったどの女の子も、ここまでかわいくて綺麗な子はいなかったな・・・・・・なんて綺麗な子なんだろう・・・・
癖のある赤い髪の毛が差し込む日の光に照らされてキラキラと輝いて、すごく綺麗だった。

どっくん、どっくん、どっくん・・・・・・・・・

すぅすぅすぅすぅ・・・・・・・・・・・・

自分の鼓動と少女の寝息だけの空間にすっぽりと包まれたかのような、でもそこはすごく心地よく、ジークはすっとこのまま時間がとまればいいのにとも思った。
う、うぅん
まぶしそうに寝返りを打つその姿に胸の鼓動が早くなるのをジークは感じた。
「うぅん、まぶしぃ、朝？」

すぅっと開かれた目は吸い込まれるように碧かった。
「だれ？」
突然声をかけられてジークの体はビクンと反応し、コクピットの縁にかけていた手が滑ってしまった。
「わぁ！」
重心が前に移りそのままコクピットに前のめりに体ごと入ってしまった。
「きゃぁ」
突然何かが上からのしかかってきて思わず少女は悲鳴を上げる。
「あてて・・・」
転がり落ちたジークは起き上がろうとして手を動かしたときだった。
むにゅう
何かものすごく軟らかい感触が手のひらに伝わってきた。
むにゅう　むにゅう
すごくさわり心地がいい。正体を確かめるために手を見ると、はだけたジャケットの下のタンクトップに包まれた二つの盛り上りがあった。大きすぎず、小さすぎず、ジャストフィット。
「こ。これは・・・。」
はっとして視線に気付いたジークが顔を上げると少女と目が合った。
「や、やぁ」
とジークは声をかける。が、しかし向こうは何が起きたのか把握できずに固まっている。
仕方なくジークは動こうとして

むにゅう　むむにゅう

また揉んでしまった。

はっ　と少女の目線がジークの手に移る。

そして次の瞬間、

きゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！

耳を劈くような悲鳴と一拍子おいて

ばっしぃぃいいいいいいいいん

という音がコクピットの外まで響きわたったのだった。

ボーイ　ミーツ　ガール（後書き）

出来る限りどんどん更新していこうとおもいますので、
ご指摘、アドヴァイス、感想　評価など宜しくお願いします！

少女エミリア

「ジーク、もう少し左だ。」
マイクホンから聞こえてくるディルの指示に従いながら
ジークはライデンを操縦する。
このライデンはトライルブレイザー（ｔｒａｉｌ－ｂｌａｚｅｒ
通称ＴＢ）呼ばれる人型機動兵器である
未開地などで道しるべとなるように通った道に目印をつける者　開
拓者という意味をもつこのＴＢは
頭に脳波を読み取るサークレットに動かしたいイメージを送り、ま
た両腕に装着したガントレットと
呼ばれる操縦桿で更に細かい動きを可能にしている。
「よし、そこでいい」
電波塔のアンテナの位置が定まり、ジークはガントレットを操って
ライデンの腕を動かし，
アンテナをボルトを締めながら固定していく。
「いっつつ。」
赤く手跡のついた頬のヒリヒリとした痛にジークは顔をしかめた。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「わたしの名前はエミリア。ハンターよ！」
赤い髪を揺らしながらエミリアはジーク達に自己紹介をした。
エミリアが上げた悲鳴で、みんなが何事かと集まってしまい、そし
て、事の次第を問いただしているところだ。
「俺はディル。そしてこっちが俺の孫のジークだ。俺たちは修理屋、
コロニーを移動しながら転々としている。と、あとこいつらはアン
ドロイドのマリア、レイ、ソフィアだ。」
ディルは集まったメンバーを紹介していった。
「さて、お互いに自己紹介が終わったところで、エミリアさん、ど
うしてうちのＴＢに潜り込んでいたのかい？」

「エミリアでいいわ。別にＴＢを盗もうとかそういうつもりでなかったのは先に言っておくわ。」
と、前置きをおいてエミリアは話し始めた。
「昨日フロンティアコロニー『クランディール』に向かう途中でクレイワームに襲われたの。
車を食べられちゃって、移動手段を失って途方に暮れてた挙句に、砂嵐がやってきて、何とかここまでたどり着いたのは良かったんだけど、真夜中だったし、仕方なく避難するために適当に潜り込んだのがあそこだったてこと。おかげで助かったわ。・・・・・でも！」
エミリアはジークを睨みつけながら
「いくらわたしがＴＢに不法侵入してたからって、あんな起こし方ありえないわ。まったく乙女の胸を何だとおもってるのよ！」
「だから、あれは事故だって・・・」
ジークは引っ叩かれた頬を濡れたタオルで冷やしながら、そっぽを向いた。
「わはははは、ジークも一丁前に男になったもんだ！でも、起こし方がちょっといけないな！」
とディルが笑う。
「じいちゃんまで！」
ディルはエミリアに向き直ると
「冗談はさておき、クレイワームに襲われたって言うなら、あんたのＴＢもお釈迦になったのかい？」
ハンターなら誰しもＴＢを持っている、いやＴＢがなくてハンターは務まらない。ハンターにとってＴＢは命と等しく大事なものだ。
「ああ、うん。ＴＢはないから」
「え？ハンターなのにＴＢもってないの？」
驚くジークに
「あ、いや、今回は修理してて持ってきてなかったの！」
いいわけをするかのようにエミリアは言った。
「よく身一つでコロニーから出ようなんて、無茶が過ぎたんじゃな

いか？」
ディルはエミリアをどことなく怪しく思った。
「次からはもうしないわ。」
とエミリアのうなだれた姿を見て
「よし、どうせここの仕事が終わったら『クランディール』に行くつもりだったからな。これも何かの巡り会わせだろう。乗せて行ってやろうじゃないか。」
「じ、じいちゃん！？」
「え、本当にいいの？・・・じゃなくてよろしいのですか？」
エミリアがうれしそうに目をキラキラさせる。
「おうよ！男に二言はねぇ！そんじゃぁ、しばらく宜しくな、エミリア。」
・・・・・・・・・・・・
とまぁこんな感じに話はまとまってしまった。
「まったく、じいちゃんも人が良すぎるよ。」
作業を終えたジークはライデンをトラックの荷台に収納しコクピットから降りた。
「うわっぷ！？」
顔に布をかけられてジークは面食らった。
「お疲れ様、それタオルだから。」
顔からタオルを取ると、荷台から下りていくエミリアの姿があった。
「何するんだよ、エミリア！」
「何って、そのタオルで汗拭きなさいって。しばらく居候だからね、それくらいのことはしてあげるわ。」
そういって、エミリアはスタスタと向こうに行ってしまった。
ジークはため息をつきながら、倉庫に向かった。
「はぁ～、何なんだよまったく。」
「ライデンの収納終わったよ。」
ジークが倉庫に着くと、そこにはディルとコロニーの取締役のハンスさんがいた。

「では、報酬のクレジットの方をと、端数はドランで、あとはこっちが日用品です。」
どうやら会計をしているらしい。
クレジットといのは惑星中央政府が発行している電子マネーのことで、いまだ物価の変動が激しいここ惑星ドラコの基準価値を決めるものである。また、大金のクレジットに対して、使いやすいようにしたのがドラン硬貨である。もっとも、ここ辺境に住むものにとっては、日用品や特産品などの物々交換のほうが多い。
ディルは思い出したようにハンスに話しかけた。
「確かに確認した。ありがとさん。」
「いえいえ、ディルさんにはいつもお世話になってますから。また次もお願いします。」
「こちらこそ頼むぜ！おっと、そういえば、今日のお昼ごろ惑星中央政府軍のＴＢを見かけたんだが、何かあったのか？」
「いや、毎回のことなんですが、今この砂嵐の多いこの時期は丁度クレイワームの大移動と重なるのですよ。きっとそのための巡回ですね。」
「なるほど、確かにやつらは金属ならなんでも口にするからな。移動する者にとっては厄介だ。」
とディルは相槌を打った。
「まぁ、あと1、2日くらいで通り過ぎるとおもいますよ。丁度アンテナも直りましたし、聞いてみます。」
「ありがたい。」
では後ほどとハンスは倉庫を出て行った。

「じいちゃん、ハンスさんの話だとここを出発するのは明後日くらいかな？」
ジークは日用品の入った箱を持ちながら横を歩くディルの話しかけた。
「まぁ、状況しだいだけどな。今回はこれで一通り依頼は終わった

し、後はギルドに報告だだけだから、少しはゆっくりしてもいいだろう。」
「でもその分、あの子と一緒にいる時間が延びるけどね。」
「なんだ、ジーク。嫌なのか？エミリアは結構可愛いし、いい子じゃないか。それに男２人きりの旅にたまには華があってもいいもんさ。」
「どこがいい子なんだよ、じいちゃんの前ではネコかぶってるんだよ、本当はもっとガサツなんだよ！」
「わはは、わかった、わかった。」
ディルはそんなジークの頭をぐりぐりとなでた。

ジークがトラックのところに着くと、マリアとレイ、そしてエミリアが夕飯の支度をしていた。
「お帰りなさいませ。」
ジークたちの姿を見てマリアが声をかけてきた。
お昼のときとは違い、少し大きめのテーブルと椅子が３つ用意されていた。
「お、うまそうな匂い！」
テーブルの上に並べられたお皿に盛り付けられたスープから食欲を掻き立てるような香りがジークの鼻を刺激し
ぐぐぅ～
と腹がなった。

「「「いただきます！」」」
用意が終わり、席に着いたディル、ジーク、エミリアは合唱して食事が始まった。
「ほう、このスープはうまいな。マリア」
ディルが珍しくスープを褒める。
「うん、今日はいつものと違うけど、おいしいよ。」
ジークもスープを？き込みながら言った。

「まぁうれしいですわ、と言いたいところなんですが、残念ながら、わたしが作ったのではないのですよ。」
「誰？」
「エミリアさんですわ」
「へぇー。」
ジークの視線を受けたエミリアはジークをギロリと睨みつけて
「何よ、その意外そうな目は！」
「い、いや？そんなことはないよ、うん。すごくおいしい。」
ジークは逃げるようにしてスープとパンを口に一緒に入れた。
「ま、居候の身だし、いる間は出来ることはさせていただくわ。」
「うむ、やっぱり華があるのはいいな！」
とディルがジークとエミリアを交互に見ながら言った。
「あ～それってどういう意味なの？ディル様！」
「うん？いや、もちろんお前達も俺の大事な華だぜ！」
コップに飲み物を注ぎに来たレイにいわれて、ディルはレイの背中をぽんぽんとたたいた。
「もう、ごまかしがうまいんだから！」
そんなレイとディルのやり取りを見てみんなが笑った。

「おかわりのコーヒーをどうぞ」
食後のコーヒーを3人は楽しんでいた。
日はすっかり落ちてあたりは家から漏れる光とジークたちのいるところ以外は真っ暗だった。
「じいちゃん、そういえばソフィア遅いよね？」
ジークが辺りを見渡しながら言った。
「そうだな、ちょっと帰りが遅い気がする。」
ソフィアは夕飯前にジークが修理した品を各家に届けに行っていた。
「そんなに数はないはずなんだけどな、俺、ちょっと見てくる！」
ジークがそういって立ち上がったときだった。
「あら？ソフィアお帰りなさい。」

丁度荷車を引いたソフィアが戻ってきた。
「おう、ソフィアご苦労さん。ちょっと遅かったがどうしたんだ？」
ディルがソフィアにたずねると
「ディル様、ハンスが呼んでる。至急」
ピンクのアイライトを点滅させてソフィアが言った。
「そうか、わかった。ちょっくら行ってくるわ。ジークここは任せたぞ。」
そういって懐中電灯代わりにソフィアをつれてディルは行ってしまった。
「どうしたのでしょうか？」
と心配そうなマリア。
「ジーク、私たちも行くわよ！」
「ちょちょっと！」
エミリアはジークを引っ張って歩き出した。
「まてよ、どうして俺たちも行かなくちゃならないんだよ！」
「どうしてって、ハンターはね、常に情報に敏感じゃなくてはいけないの！」
「それならエミリア一人で行けばいいじゃないか。」
「なによ、このくらい夜道でか弱いレディーを一人で行かせる気？痴漢に襲われちゃった大変とかおもわないの？」
「か弱いって、お前ハンターだろ？痴漢の一人や二人どうにかなるだろ？」
そう言ったジークにエミリアは今度は耳を引っ張って引いていく。
「エ、エミリア、痛いよ！」
「離して欲しかったら、つべこべ言わないで来る！」
すごむエミリアに痛さも合わさってジークは観念した。
「わかったよ、一緒に行けばいいんだろ？後でじいちゃんに怒られても知らないんだからな！」
ジークは赤くなった耳をさすりながら、エミリアの後について行くのだった

砂原での遭遇

ディルがソフィアと共にハンスの家の前まで行くと、玄関の外でハンスが立って待っていた。
「すみません、お呼びしてしまって・・・」
「いや、かまわない。どうしたんだ？」
ハンスはドアを開けると、ディル達を家の中に迎え入れた。
「どうぞ、お座りください。」
ディルが椅子に座るとハンスは口を開いた。
「実は、先程のことなんですが・・・」
「ああ、クレイワームのことか、どうなったんだ？」
「それが・・・」
ハンスは歯切れが悪そうに話し始めた。

「エミリア、もうちょっとつめてくれよ。」
「もう、押さないでよ。」
ディルのあとを追うようにしてやってきたジークとエミリアは扉を少し開けて中の様子を伺う。
ディルの背中越しにハンスが見えた。
「今日偵察に向かった、惑星中央政府軍と連絡がつかないんです。本部にも確認を取ったのですが、そちらにもまだ連絡が行ってないようで・・・」
「う～む。」
ディルは考え込むように腕を組む。
「こんなことは今まではなかったのですが、申し訳ありません。」
ハンスが顔をゆがめ、すまなそうにした。
「その偵察の場所はここから近いのか？」
「え、あ、はい。ここから２０ｋｍの地点です。最後の連絡が入ったのもそこだと・・・。」

腕組みをとくとディルは
「明日、夜が開けたら俺がいって見てこよう。」
「え、しかし・・・。」
「どうせ、ここに足止めをくらって暇なんだ。なぁにちょっくら様子を見てくるだけさ。」
ハンスは少し迷ったが、
「わかりました。後続の偵察隊がくるにしても時間がかかるでしょうし、すみません、お願いします。」
「おうよ、そうときまったら・・・」
そういっておもむろに立つと扉のほうに歩いていく。
「もう、どこ触ってるのよ、エッチ！」
「しかたないだろう？よく聞こえないんだから・・・」
がちゃり、
「「わぁ」」
いきなり扉が開いて二人は家の中に転がり込んでしまう。
「いったーい」
「いっつっつ」
ディルはそんな二人を見下ろしながら、
「はー、ったくお前達は仲がいいのか悪いのか、とにかく今聞いての通りだ。明日は早いぞ！」
そういって家を出て行く。
「おら、とっとと帰るぞ！」
「お邪魔しました！」
ジークは急いでディルのあとを追う。
「お、お邪魔しました。あ、ちょっと待ってよ！」
ぺこりとお辞儀をするとエミリアもジークのあとを追っのだった。

次の日、朝食を済ますとジークたちは、トラックに乗って夕べ、ハンスが言っていた地点に向かった。
「ジーク、準備はどうだ？」

「ああ、ばっちりさ！」
ライデンのコクピットの中でガントレッドを握りしめ、ジークはマイクホンでディルに返事を返した。
モニターに映し出された景色はどこまでも広がる砂原だった。
「しかし、こんな土地が後数日したら一面緑になるなんて信じられないな。」
砂嵐と共に通り過ぎたクレイワームが土地を耕し、そこに雨が降る。その豊かな大地に様々な植物が芽を出し、ゆくゆくは多くの実りをもたらす。そこにハンスたちは目をつけてこの地を開拓したのだ。
「今回でハンスたちは三シーズン目。何事もなければいいんだがな・・・」
辺境を開拓することは多くの危険が伴っている。未開の最前線であればなおさらだ。そのため、そこを本当に開拓していけるかどうかを判定する期間が決められており、三回同じシーズン、コロニーを維持し、そこのコロニーだけで脅威を取り払うことが出来た場合、正式にフロンティアコロニーとして認められ、名前をつけることが出来る。名前がつけばそれは安全の証となり、来る人も増えてコロニーはどんどん大きくなっていくのだ。
「ジーク、何が起こるかわからない。油断するなよ。」
「わかってるって。でもこういうのって本来はハンターの仕事じゃないの？」
とジークはエミリアに話を振ってみる。
「だからついてきたんじゃない。それにＴＢはパーソナル認識があるから、わたしじゃあ、そのＴＢは動かせないわ。ま、何かあったらわたしのハンターとしての知識を披露するわよ！」
運転するディルの後ろでエミリアは胸を張った。
「そろそろ着くぞ、二人とも、おしゃべりは終わりだ。」
ジークたちが予定地点に着くと、そこにはクレイワームの死骸が転

がっていた。
「こ、これは・・・」
その数は３０を軽く超え、みんな声を失う。
「一体何があったんだ?！こんなことは聞いてないぞ・・・」
ディルはハンドルを握ったまま窓の外を見た。
「ちょっと辺りを見てくる。じいちゃんとエミリアはそこにいてくれ。」
「あんまり遠くには行くなよ。」
「わかってるって。」
ジークはライデンを操作して荷台から下りると、近くにあったクレイワームの死骸の傷口を確かめた。
「ライフルや剣で出来た傷じゃないみたいだ・・・なんかこうギザギザなもので切り裂かれたような感じだ。」
「それって、何か他の生物に襲われたって事かしら・・・」
「さぁ?あ、あそこにＴＢが！」
ジークは半壊したＴＢに近寄った。手足は破壊され、コクピットは切り裂かれていた。その亀裂部には血が大量に付着している・・・おそらくこのＴＢの操縦者は無事ではすまないだろう。そして視線を肩に移すと惑星中央政府軍のエンブレムが描かれていた。
「こ、これは惑星中央政府軍のＴＢだ！」
ジークの言葉にいやな予感がディルの頭によぎる。
「あ、こちにももう一体あった・・・駄目か・・・こっちもやられてる・・・」
ジークは辺りを見渡すが、三体目は見当たらなかった。
「じいちゃん、もう少し探す?」
「いや、とりあえずその二体を荷台に載せるんだ。」
ジークは最初に見つけたほうを抱え、
「よっと。」
と荷台の置くに押しやる。そして二体目に近寄ったときだった。

ビービービー
緊急のアラートが鳴り、レーダーに生命反応を示す赤い点が数個、表示された。
「こ、これは・・・」
ジークはモニターに目を移し、目を見開いた。
ギチギチギチギチ
目の前にＴＢの腰の高さくらいはあろう大きなサソリが数匹、尻尾を高く振りかざし、両手についた鋏をすり合わせながら威嚇している。
「ス、スコーピオン？」
この辺境で生きる限り、そこに生息する危険生物は頭には入っている、しかしスコーピオンは水辺に生息していて、こんな砂の多いところで生息しているわけがない。もっともここ近辺での確認は報告されてはいないはずだ・・・
「どうした！」
ディルの声にジークは我を取り戻した。
「じいちゃん、スコーピオンだ。今映像を回す。」
モニターにまわってきた映像を見てディルはうなった。
「なんで、こいつらがここに？しかもちょっと色が違うのか？」
本来赤いはずのハサミの部分が紫色になっている。
「ヴァイオレット！？こいつらが、なんで！」
後ろから覗き込んだエミリアの顔が険しくなる。そして、
「ジーク、いいからすぐに荷台に戻るのよ！」
「え？でもこいつも荷台に乗せないと・・・」
「そのままだと、あなたもライデンごとスクラップになるわよ！」
「わ、わかったよ・・・」
エミリアの剣幕におとなしく従うジーク。
しかし、そんなジークに一匹が踊りかかった。
「うお！」

なんとかそれを転がるようにしてジークは避けた。紫色のハサミがジークの代わりに脇にあったＴＢを挟み込むとそのまま紙の様に引きちぎった。
「なんて鋭さなんだ！」
ジークはたまたま近くに落ちていた、おそらく今切り裂かれたＴＢのものであろう剣を拾い上げ、スコーピオンにむかって構えた。
「あんの、バカ！何やってるのよ！」
それをモニター越しに見ていたエミリアは運転エリアの後部扉を開けた。
「どこに行くんだ？！」
ディルは驚いてエミリアに声をかける。
「ディルさん、急いでここを離れて！」
「だが、ジークがまだ・・・」
「いいから、ジークはわたしに任せて！」
「おい！」
ディルの制止の声にも振り返らず、エミリアはトラックの外に躍り出る。
「しかたねぇ、ここはエミリアを信じるか！」
アクセルを踏み込んでディルはトラックを発信させる。
トラックが動き出したのを確認すると、エミリアは胸元に隠してあったペンダントを取り出し握り締めた。
「来て！ローエン・シュツルム！！」
そして、エミリアの体が真紅の光に包まれてた。

「どりやぁあ！」
ジークは襲い掛かるスコーピオンの攻撃を何とかかわしつつ、そのハサミに切りかかる。
カキィーン
しかしジークの剣は乾いた音を立てただけで、傷一つつけることなくはじかれてしまった。

「やっぱり剣じゃあ駄目か。」
ジークは剣を投げ捨てると、ライデンの背中に納められいる工具からひときわ大きくそして赤茶色にさび付いたレンチを取り出した。
「こっからが本番だ！」
ジークはそれを肩に担ぐ様に構える。
ギチギチギチギチ
急にジークの纏う雰囲気が変わったのを察したのか、スコーピオンもじりじりと距離をつめつつも攻撃をためらっている。
しかし、業を煮やしたのか、他の一匹がジークに襲い掛かった。
「ここだ！」
ジークは襲い掛かったハサミをレンチではさむと
「ブレイク！」
その勢いを利用してハサミごとサソリの腕をねじ上げた。
キシャァァ！
叫び声と共に、ハサミが根元からちぎれる。しかし、ジークの攻撃はそれでは終わらない。
そのままハサミをスコーピオンの眉間に突き刺したのだった。
ギシギシギシギシギシ・・・バタン。
肢を痙攣させ、そして尾が力なく倒れた。
「さて、どうするかな・・・」
ジークは周囲に視線を戻すと自分が囲まれていることに気がついた。
仲間を倒され、戦意喪失すると思いきや、逆に煽る形になってしまったようだ。
じりじりと包囲を狭めながらジークにスコーピオンはにじり寄っていく。
と、いきなり目の前の一体が炎に包まれた。
「な、なんだ？」
次々に炎が降り注ぎ、砂煙を上げる。
上を見上げると、大きな影が空をさえぎるようにして宙に浮いていた。

「ド、ドラゴン？！」
よく見れば、真紅体におきな翼をもったドラゴンだった。
どうやら助けてくれるらしい。
「誰だか知らないけど、助かるぜ！」
ジークは外部スピーカーでお礼を言うと再びスコーピオンに向かって構えた。
しかし、ドラゴンはライデンの肩をつかむと再び飛翔した。
「お、おい？！」
いきなりのことでジークが手足をじたばたさせると
「ジーク、バランスが崩れてうまく飛べないから動かないで！」
ジークはその声に驚いた。
「お、お前エミリアなのか？」
動きを止めたジークを見て
「飛ばすわよ！」
真紅のドラゴンは速度を上げたのだった。

砂原での遭遇－2

「エミリアがドラゴンだったなんて・・・」
ジークは驚きを隠せなかった。
辺境のコロニーを旅してきたジークは人の姿のドラゴンには何回もあったが、こうして実際に変身した姿を見るのは初めてだった。
真っ赤に燃えるような赤い体に、更に真紅のタテガミが炎のように風に揺られて揺らめいていた。そしてどこまでも深い碧い瞳で、行く先を見つめている。その美しさにジークはモニター越しに見入ってしまった。

しばらく飛ぶと、ディルの運転するトラックが下に見えた。コロニーの手前でトラックが止まっていた。
ライデンをトラックの横に降ろすと、真紅のドラゴンは静かに地面に降り立った。そしてその体が光に包まれ霧散すると、エミリアがそこにいた。
「ふぅー。」
結構飛んだためだろうか、息をつくと、癖のあるその赤い髪をかき上げる。
「エミリア、助かったよ。」
ライデンから降りると、ジークはエミリアに水筒を手渡した。
「コクコクコクコク・・・ハー！」
気持ちのいいくらいの飲みっぷりだ。
「ジークこそ、怪我はなかった？」
「ああ、おかげでね。」
「ならよかったわ。」
ホッと胸をなでおろすエミリア。
「でも、エミリアがドラゴンだったなんてびっくりしたよ。」
「なに、わるい？！」

「いや、そういうわけじゃなくて、あ、ほらエミリアはハンターだし、珍しいなって。」
「まぁ確かに、ドラゴンでハンターをしているのは珍しいかもね。」
大戦以降、ドラゴンと人の距離は縮まっていて、コロニーで一緒に暮らす事も今では珍しくはない。
しかしながら、昔の争いの原因の密漁を主に行ったのがハンターということもあり、自らハンターになろうというドラゴンはいなかった。
「わたしにも色々事情ってもんがあるのよ。」
そういって水筒をジークに返した。
「おーい。」
コロニーの入り口の方からディルが歩いてきた。その少し後ろに送れてハンスも歩いてくる。
「二人とも無事だったか。」
ディルはジークとエミリアを見てからニカっと笑った。
「何とかね、エミリアのおかげだけどね。」
「あ、あのう、わたし・・・、」
エミリアがばつが悪そうな顔をしていると
「ジークをありがとな、まぁちょっとびっくりしたけどよ、おかげで助かった。」
「で、でも、・・・」
「ああ、お前さんがドラゴンだったてことか？別に隠すこともないけどよ、自分の正体を隠しておきたかったんだろ？誰にだって一つや二つ秘密があるもんさ、それに俺達はまだ会って1日も経ってない。仕方ないさ。」
そういって、ディルは気にするなとぽんぽんとエミリアの肩をたたいた。
「いえ、わたしは・・・・でも、一応、ごめんなさい。」
エミリアは顔をうつむかせ謝る。
「なんだよ、俺のときとはぜんぜん違うじゃないか。エミリアの猫

かぶり」
とつぶやきながら、ジークは横を向くと、ハンスがライデンのスパナに挟まったままの紫色のハサミを見上げていた。
「これがスコーピオンの爪ですか・・・。」
「ああ、ＴＢの装甲も簡単に切り裂いちまうぜ。」
ジークは荷台の上のＴＢを指差した。
「こ、これはひどい・・・」
荷台の上の大破したＴＢを目の当たりにしたハンスは驚きを隠せないでいた。
「ハンスさん、今までこんなことはなかったのか？」
ディルの言葉に振り返った顔は青かった。
「い、いや、今まで、こんなことは一度も・・・。ましてやスコーピオンだなんて・・・」
「ふむ」
ディルはハンスの答えに腕を組む。
「俺が見た限りだと、スコーピオンはクレイワームを捕食しに来てたようだな、でも、やつらは水辺に生息してるんだろ？わざわざこんな砂原まで出向くものなのかな」
ジークはクレイワームの傷口をお思い出しながら言った。
それを聞いて、はっとして腕組をとくと、ディルはエミリアに話しかけた。
「そういえばエミリア、あのスコーピオンのことを知っているようだったな、確かヴァイオレットだったか？」
「ええ、あのスコーピオンは爪が紫色であることからヴァイオレットと呼ばれているわ。ノーマルのスコーピオンに比べてはるかに獰猛で身体能力も上よ。」
「うむ、だが、お前さんが驚いていたのは違うだろ？」
「そうなの。きっと、同じ強さの生物ならば、雨季の砂原にもいるはず。わたしが驚いたのは、彼らがあそこにいたことなの。本来はクレイワームが多くいる火山にいるはずだもの。生息する場所がま

ったく違うのよ。」
「あそこも生息地の一つだったんじゃないのか？クレイワームの移動ルートだし、良くある話だぜ。」
ジークの言うことは一理あった。しかし、というようにハンスが口を開く。
「雨季、乾季と繰り返すこの砂原でクレイワームがこの地を訪れるのは乾季の終わりだけ、それだけのためにここに住み着くのでしょうか？」
「たしかにな、しかし、こうして実際に生息していたのだから、それを視野に入れてコロニーの防衛も考えていくしかないな。」
ディルは鋭くとがった紫色のその爪をじっと見つめながら言った。
「ですね、私はとりあえずこのことを惑星中央政府に知らせてきます。」
ハンスがコロニーに戻ろうとしたときだった。
「や、やばいわ・・・肝心なこと忘れてた。彼らはとても執念深いの。爪がこうしてあるかぎり、これを追ってくるわ。ここにくるのも時間の問題・・・」
エミリアは唇をぐっとかんで、自分のうかつさに顔をしかめた。
「そ、そんな・・・・」
「おそらく、マザースコーピオンを核とした２０匹位の集団のはずよ。」
「マザースコーピオン！？、それが本当ならこのコロニーはひとたまりもない！」
さらい追い討ちをかけるようなエミリアの言葉に頭を抱えるハンス。
「こいつはやばいことになったな、急がないと取り返しが着かなくなる。ハンスさん、急いで惑星中央政府に連絡を、あと『クランディール』のギルドにも救援要請を呼びかけてくれ。」
ディルの指示にハンスは駆け足でコロニーの中に戻っていく。
そして
「とりあえず俺達もコロニーに戻るぞ。ジークはそのままライデン

で作業用の倉庫まで来い。エミリアはこっちに。」
トラックにエミリアを載せるとディルは、ライデンに乗り込むジークの目の前を砂煙を上げながらコロニーへと入っていった。

倉庫に着くと、ディルが工具を用意していた。
「じいちゃん」
外部スピーカーを使ってジークが声をかけると
「そのまま乗ってろ。」
そして忙しそうに右往左往している。
横を見るとさっきもって帰ってきたＴＢの残骸があった。
「まさか、これを修理するの？」
どう見てもこの残骸から元のＴＢにするのには材料がなさ過ぎる。
「ジーク、そのスコーピオンのハサミと腕をうまく切り離すんだ。」
「一体何するんだ？」
「いいから言った通りにしろ！」
「わかったよ。」
長い付き合いだ、こういうときは従うのがベスト。
ジークは鋭いハサミのほうをぼろで包み、腕の部分を掴んで爪との付け根を動かしてみた。
「・・・・ここだな。」
さっきの戦闘でこのヴァイオレットの外殻の硬さは分かっていたため、一番弱い関節の部分をきることにしたのだ。
ジ、ジジジジ、ジジ
レーザーメスでその関節部を焼き切っていく。
一周してジークは思いっきり腕の部分を引っ張った。
ぬるん
爪の中からスコーピオンの身が飛び出して卵の腐ったような硫黄臭を放った。
「わぁあ、くっせぇ・・・、」
ライデンのコクピットまで入ってきた悪臭が倉庫を満たす。ジーク

は急いで近くにあったシートにくるんだ。
「そういえば、エミリアは？」
「ああ、休んでもらってる。」
マスクをして爪の具合を見ながらディルが言った。
「ええ、一人だけずるいな。」
「何を言ってるんだ、ドラゴンは変身するのに体力を使う。さっきお前を助けるために結構体力を消耗したようだしな。それに、ここを守るためにまた、戦ってもらわないといけないからな。」
たしかに、自分を助けるために、あれだけの火炎を吐いておまけにあの距離を飛んだんだ、そう思うと
ジークは自分の言った事がはずかしくなった。
「おい、ジーク、ライデンのスパナをここにおいてくれ。」
ジークは戦闘に使ったさび付いたスパナを爪に並べておいた。
「ふむ・・・これをここにはめればいいか・・・」
ディルは爪の寸法とスパナのボルトを挟むコの字になっている部分の寸法を比べながらぶつぶつ何か言っている。
「よし、ジーク、このスパナのコの字の部分にこの爪をはめ込んでみろ。大きいほうが外で小さいほうが持つ方な。無理そうだったら、スパナのほうを削れ。」
「分かった。」
ジークはパズルのように紫色の爪をスパナにはめ込んでみた。大きいほうはきつめだがなんとか入った。しかし小さいほうは削らないと駄目なようだ。削りすぎてゆるくなりすぎないように慎重に削る。ガンドレッドの中の手に緊張の汗でびっしょりだ。
「よし！」
なんとかはめることが出来、ジークは額の汗をぬぐった。
「じいちゃん、できたぜ。」
壊れたＴＢをいじくっていたディルが具合を確かめに来た。
「いいできだ。よし、後は俺がやっておこう。ジークお前はもういいぞ。」

「え？でも・・・」
「お前だって一戦やりあったんだ、次に備えて休め。」
ジークがライデンから降りると代わりにディルが乗り込んだ。
「調整もすましておくからな。ゆっくり休んで来い。」
「ありがとう。じいちゃんもほどほどにな」

倉庫をでると、空が赤く夕焼けに染まっていた。
倉庫の裏手に歩いて行くと、美味しそうな匂いが漂ってきた。
見るとトラックの横でマリアたちが食事の支度をしていた。
「ジークお疲れ様、ディル様は？」
食器を持ったマリアが寄ってきた。
「ああ、まだ倉庫に中にいるぜ。」
椅子に座ろうとしたジークに
「ジークご飯はまだだから、シャワーでも浴びてきなよ。」
とレイが声をかけた。
「うん、そうするか、結構汗かいたからな。」
そういって立ち上がると、居住区の扉に手をかけた。
「じゃあ浴びてくるわ。」
バタン
そういってジークは中に入っていった。
「あ、エミリア、シャワー中・・・」
ソフィアが閉まったドアに向かってボソッと言った。
「「・・・・え？」」
マリアとレイの手が止まる。
・・・・・・・
すると中から
「きゃぁあああ！」
「エ、エミリア！」
「なんであんたがここにいるのよぉ！」
「え、あ、シャワーを浴びようとおもって・・・」

「え、じゃないわよ、それにいつまで人の裸をじろじろ見てるのよお！」
「ぐえぇええ」
ドタンと何かが倒れる音が中からする。
「ジーク、ごめん」
ドアに向かって手を合わせるソフィア。
「あらあら」
「あちゃー」
マリアとレイが額に手をやってやれやれと首をふたのだった。

「いててて、」
ジークは頭を抑えながら椅子に座っていた。
「ジーク、ごめん」
ソフィアがお皿を並べながら謝る。
「本当に災難だったわ。」
エミリアは頬を膨らませながら腕組みをしている。
「エミリアは、すぐに手が出るからなぁ、まったく。」
「なによ、ジークがいけないんでしょ？」
エミリアとジークが言い争っていると
「またなにかあったのか？」
そこにディルがやってきた。
プイっとエミリアはそっぽをむく。
そんなエミリアに苦笑いを送りながら席に座る、とディルはみんなを集めて話を始めた。
「みんなに良く聞いて欲しいんだが・・・さっきハンスが来てな。」
そして顔をしかめながら
「惑星中央政府に救援要請はしたが、時間が掛かるとのことだ。後、クランディールの方もヴァイオレットの襲撃を受けているらしくこっちに回す戦力がないらしい。」
「それって！」
「ああ、どうやら今回の一件はここだけじゃないらしいな。クランディールの状況も気になるが、いずれにせよ、救援は間に合いそうにない。」
「そんな・・・」
「ハンスとも相談したんだが、このコロニーには戦力になるＴＢもない。エミリアとＴＢ一機じゃ到底しのげはしないだろう。そこで、辛い選択だが、このコロニーはあきらめることになった。」

「そんな・・・」
ジークはこぶしを握りしめる。
「そこで俺達は住民を避難させるための時間を稼ぐことになった。
あくまでも陽動だからな、避難が完了したら俺達も逃げる。」
「わたしがもっとちゃんとしてれば・・・」
エミリアは悔しそうに目をを閉じ肩を振るわせた。
「エミリアのせいじゃないよ。それにクランディールも襲われてるんだ。ここも遅かれ早かれ襲撃される運命だったんだ。」
「ジーク・・・・。」
ジークを見た目は涙でうるんでいた。
「そうだな、ジークの言うとおりだ。もう時間があまりない、さっさとメシを済ませて準備するぞ。」
そういってディルはマリアたちにご飯の用意をせかすのだった。

それから2時間後、コロニーから見える位置にヴァイオレットスコーピオンの大群が姿を現した。
ギチギチと爪をこすり合わせながら、コロニーの様子を伺っているようだ。
「ハンス、避難状況は？」
ディルはトラックの中からハンスに確認をとる。
「あと半分です。」
ハンスたちはこういう事態に備えて以前からシェルター用として用意してあった近くの洞窟に避難を始めていた。
「マリア、レイ、ソフィア、しっかり誘導するんだぞ！」
「もちろんですわ！」
非戦闘員であるマリアたちはコロニーの住民の避難の手伝いに行っていた。
「いよいよだな。」

トラックのレーダーに映った索敵反応を示す無数の赤い点を見ながら、ジークは気合を入れた。
ディルは振り返ると、
「それじゃあ、準備にかかってくれ。いいか、お前達、これはあくまでも時間稼ぎなんだ。いつでも離脱できる様に深追いはするなよ。」
「分かってるわ！」
「分かってるって！」
ジークとエミリアはトラックの運転区画から外に出て行く。
「おい、ジーク！」
エミリアのあとを追って出ようとしたジークが振り返ると
「これをもってけ」
ディルの手から、ぽーんと投げられたものをジークはキャッチする。
「プレゼントだ！」
「え？」
突然のことに呆けるジークに
「今日はお前の１６歳の誕生日だったな。本当はクランディールでゆっくりやるつもりだったが、こうなっちまったらしかたない。これが終わったら改めてしてやるが、取っとけ！」
ジークの見下ろした手の中には、四角柱の水晶の様に透き通ったペンダントがあった。
「でもこれって、じいちゃんの大事なものじゃないか。」
驚くジークに
「いや、それは俺の息子、つまりお前の親父に１６歳になったときに渡したものだ。あいつが亡くなって俺の手元に戻ってきちまったが、これでようやく渡せる。大事にしろよ。」
「これは、じいちゃんの・・・・そして親父の大事なもの・・・」
ジークは胸が熱くなった。
「ほら、行って来い」
「ああ、いってくる！」

ジークは勢いよくトラックを飛び出した。

倉庫につくと、ライデンがジークを待っていた。
ライデンには、大破したソードタイプのＴＢから取り外された装甲が取り付けられていて、少しでも防御力を挙げようとする試みがなされている。
「じいちゃん、ありがとな。」
ジークはそういいながらライデンのハッチを開けコクピットに乗り込んだ。
「よし、」
ジークは両頬をたたいて気合を入れると、サークレットを頭にかぶりガントレットに手を通す。
「ライデン、起動！」
ジークの声に反応してライデンのメインモニターに光が灯る。
「システムチェック」
ライデンのコンディションを呼び出しジークは各駆動部の状態をチェックしていく。
「システム、脳波シンクロオールグリーンだな」
そしてライデンの背中にさっき改造したさびたレンチを背負いジークは倉庫を後にした。

「来たわよ！」
コロニーの入り口に行くとエミリアが、ゆっくりと迫ってくるスコーピオンの群れを睨んでいた。
「すごい数だな。」
「わたしは空から牽制するわ。ジークもビビッてないでしっかりやることやってよね！」
そういい残すとエミリアは走り出す。そしてそのまま光に包まれたかと思うと、ドラゴンの姿になって真紅の翼を広げ夜空に飛び上がった。

ジークは思い出したようにズボンのポケットを探るとさきもらったペンダントを取り出して、首にかけた。
「よし、行くぜ！」
ジークは走り出すイメージを頭の中に描く。するとサークレットがそれを読み取ってライデンは走り始めた。
ドォーンドォーンドーン
空から地上に向かって炎が降り注いだ。エミリアが先制攻撃を仕掛けたようだ。
集団でこっちに向かってきたスコーピオンは炎を避けるようにして散らばる。
ギシャシャシャ
しかし、運悪く逃げ遅れて炎につつまれたスコーピオンが砂の上を転げまわった。
「くらえ！」
ジークはライデンの背中のスパナを掴むと、ふりぬく勢いのまま先端についた紫色の爪を、近くのスコーピオンの頭にたたきつけた。ぱっくり頭をたたき割られて青い体液を吹き上げながらスコーピオンは絶命する。
「次！」
空からの攻撃でおもうように身動きが取れなくなっているところをジークは次々に攻撃していった。
「ジーク、避難はあと少しで終わりそうだ。深追いはするなよ！」
マイクホンにディルの通信が入った。
「でもじいちゃん、このまま駆逐できちゃいそうだぜ。」
最初は２０匹以上いたスコーピオンがもう2～3匹しか残っていなかった。
その3匹は劣勢と見たのか、後退を始めた。
「逃がさないぜ！」
ジークは追いかける。
「何かがおかしい・・・ジーク油断しないで！」

エミリアが注意を促したそのときだった。
ジークの足元が盛り上がり巨大な紫色の爪が地中から突き出してきた。
「おわわわ！」
転がりながらジークはかろうじて突き上げから逃れた。
ギシェヤアアア
地中から現れたそれは、今まで戦っていたその優に3倍はあった。
「マ、マザースコーピオン」
エミリアの声にジークはモニター越しにその巨体を確認する。
2つあるハサミのうち片方にはさっき逃げようとしたスコーピオン達ががはさまれていた。
ブシュゥウウ
マザースコーピオンは無残にもツメのなかのスコーピオンを挟み込んでバラバラにしてしまった。そしてそれを食べ始めた。
「なんてやつなんだ・・・」
ごくりとジークは唾を飲みこんだ。
ドンドンドン
上空からエミリアが火炎をマザースコーピオンにむかって吐き出す。
しかし、その火炎は巨大な爪にぶち当たるとあっけなく霧散してしまう。
ブォン
エミリアに向かってそりあがった尾が迫る。
「くっ！」
エミリアは避けるように更に上空に上昇した。
「あの爪を何とかしないと」
ジークはその大きな爪に向かってスパナをたたきつける。
カキィーン
乾いた音を立てて、スパナははじかれる。
ビービービー
アラートと共にモニターの上腕部が黄色く点滅する。

ピシピシ
そしてスパナに付いた爪にひびが入った。
「なんて硬いんだ！」
エミリアを逃したマザースコーピオンが、今の攻撃でジークに気がついたのか、ゆっくとジークに振り向く。
「避難は終わった。ジーク、エミリア、後退するんだ！」
「わかった！」
ジークはここまでだと、後退を始めた。
ガサガサガサガサ
しかし、巨体に似合わない素早さで砂の上をすべるようにジークに迫る。
「くそう！」
背中のバーニアをふかしながら振り回されるその紫色の巨大な爪をかろうじてかわす。
しかし、これでは後退できない。
二連続で爪をかわし、バーニアの噴射が終わり地面に足がついたときだった。
間髪いれず尾がなぎ払われた。
「こなくそぉお！」
ジークはかわせないと判断し、スパナを盾にそのまま、たたき飛ばされる。
スパナは威力を殺しきれず歪み、ライデンはディルが装着した装甲を紙の様に撒き散らしながら宙を舞う。
「うわぁあああああ」
コクピットがこれでもかというように揺さぶられる。
ザザァアン
そして砂の中にうずまるようにして地面に落ちた。
ビービービー
各駆動が赤く点滅する。
ジークもあまりの衝撃に頭を打ったのか、血を流した。

ギシャエェエエ
トドメを誘うとしてマザースコーピオンはハサミを振り上げる
「ジーク！」
それを見たエミリアがマザースコーピオンに肉迫しながら至近距離で炎を吐きつける。
マザースコーピオンはその炎を巨大な爪で振り払うと、尾をエミリアにたたきつける。
グロォオオオ
攻撃の合間を縫った一撃を喰らい地面にたたきつけられるエミリア。
「エ、エミリア」
ジークはエミリアを助けようとしてライデンを動かそうとするが、さっきの衝撃でライデンは立ち上がることもままならなかった。
かろうじて動くカメラアイでエミリアを探すと、その真紅の体が紫のハサミにがっちりはさまれいた。エミリアは逃げようと牙を立てるが爪の表面を引っかくだけで終わってしまう。
「エミリア！」
ジークの叫ぶ声も虚しく、ハサミに力が加えられ、苦しそうにエミリアがうめく。
ギシャシャシャシャシャシャ
笑うかのように雄たけびをマザースコーピオンがあげたときだった。
「やらせねぇ！」
ドゴーン！
その巨体にトラックが突っ込んできた。突然の出来事で爪が開き、エミリアは砂の上に投げ出された。
「今のうちにげろ！」
ディルから通信が入る。
「じいちゃん！？」
トラックは砂煙を上げながらマザースコーピオンを押す。しかし、それをうっとしそうに尾がなぎ払われると横転してしまった。
そしてトラックをハサミで持ち上げると、エミリアの倒れているほ

うに投げつける。
「うおおおおお」
マイクホンからディルの声が聞こえる。
そしてトラックは倒れたエミリアにぶつかってしまう。
「じいちゃん！エミリア！」
じりじりとエミリアとディルのトラックにマザードラゴンはにじり寄っていく。
エミリアは真紅の体を起こすと、そのトラックの運転区をかばうようにして抱きかかえた。
ギシャエェエ、ギシャエェエ
そんなエミリアをなぶるかのように尾と爪でその体を滅多打ちにする。
グォオオオオ
エミリアが苦しそうに叫ぶ。
「エミリア、じいちゃん、くそう！」
ジークは叫びながらガンドレッドを動かし、
「たのむ、動いてくれ、動いてくれ！」
必死に立ち上がれとライデンに命令を飛ばす。
「くそ、くそ、このままじゃ、じいちゃんが、エミリアが、頼む動いてくれぇえぇ！」
力いっぱいガントレットをはめた手でモニターをたたくが、ライデンは動かなかった。
打ち据えられていくたびに真紅の翼がぼろぼろになり、鱗と血が飛び散る。
「ジ、ジーク逃げて・・・」
「ジーク、いいからお前だけでも逃げるんだ・・・。」
マイクホンからエミリアとディルの声が聞こえた。
「くそう、こんなのってあるかよ、俺はまだ戦えるのに、じいちゃんとエミリアを見殺しにして逃げてたまるか！」
「辺境ではいきのこった、者の勝ちだ。逃げるんだ。」

「そ、そうよジーク。短い間だったけど、楽しかったわ。無事に逃げ延びてね・・・。」
そしてプツン、通信は途切れた。
「くそう、くそう」
ジークは無駄だとわかっていても必死になってガントレットを動かす。そして、
「エミリアを、じいちゃんを、助けたいんだ。ライデン、頼む、後一回でいい動いてくれ、俺は逃げたくないんだぁ！」
ジークは叫んだ。

パァアアアア

胸が急に光だし、ジークは驚く。そしてそれに呼応するかのようにメインモニターの基部が競りあがった。
「こ、これは・・・」
そこには二つのスロットがあり、丁度そのペンダントの水晶の大きさだった。
ジークはスロットの点滅しているほうに首から外したペンダントを差し込んだ。
ガチャン、ウィーン
するとモニターが中央で2つに別れ、更に円状のモニターがその間から出てきた。

「生体データー、ジークと確認。これからライデンをワークモードからバトルモードに移行します。」
とスピーカーから女性の声が聞こえた。
「き、きみは」
おもわずジークは聞き返してしまう。
「わたしはライデンのメインインターフェイスのセシルです。以後お見知りおきを。」

「あ、ああ、宜しく」
「バトルモード起動。システムをチェック、オールグリーン！」
右のモニターにライデンの駆動系が映し出され、今まで赤かったのが全て緑色になっていた。
「うごけるのか？！」
ジークの意思をうけとってライデンは起き上がった。
「フェイクモード解除！」
ライデンのさび付いて凹んでいたボディに光が走る。
そして現れたのは、深い青の騎士のような鎧姿をしたボディだった。
「バトルモード移行完了。ジーク様、いつでもどうぞ！」
「これは・・・・ライデン、俺にこたえてくれたんだな、ありがとう。」
ジークは足元に転がっていたゆがんだスパナを拾い上げると
「おおおおおお」
バーニアをいっぱいに噴かして、マザースコーピオンに殴りかかる。
ドゴン
その一撃は、丁度トドメをさそうと振り上げた爪に重く突き刺さる。
スパナのヘッドはそのままへし折れたが、その紫色の爪に大きなひびを入れた。
ギュシェェェ
マザースコーピオンは苦しそうにその場から後退する。
「エミリア！」
エミリアはぼろぼろになった体をもたげ、ライデンを確認するとそのまま力尽きたのか、倒れこんだ。
そして光に包まれると、人の姿に戻って横たわるエミリアがそこにいた。
「こっちだ！」
ジークはその場から離れるために、マザースコーピオンを誘導する。
ブォン、ブォン
振り回される爪と尾をジークは軽々とかわしていく。

「セシル、何か武器はないのか？」
「拳しかありません。」
「それってないってことじゃんか、くっそう。」
ジークが武器を探そうと辺りをスキャニングしようとしたときだった。
「ジ、ジーク、これを使え！」
ディルから通信が入ると後方に切り離されて置いてあったトラックの荷台がせり上がり、板状のボロに包まれた何かが飛び出した。ジークは爪攻撃をかいくぐってバーニアをふかすとボロから飛び出た柄の部分を掴む。
「これは剣？！」
着地し、ボロをはぐと、それは分厚い板状の剣でその刃の部分は途中から二股に分かれている。
「はい、ソードブレイカーです」
とセシルがモニターに説明を加えながら言った。
「こいつならいける！」
それを見てジークはソードブレイカーを肩に担ぐ。
「いくぜ！」
ドンとバーニアを吹かしマザースコーピオンに迫る。
それを見たマザースコーピオンは振りかぶった爪をジークに向かって振り下ろした。
「待ってたぜ！」
ジークはその爪をソードブレイカーの刃と刃の間に挟みこむ。
爪の勢いも合わさって、内側の刃が爪に切れ込みを入れていく。
「いまだ、ブレイク！」
そこに力が加わり、
バギン
その巨大な爪は根元から切り離された。
ギシェェェァァァ
怒り狂ったマザースコーピオンは尾を高くそらせ、ジークにたたき

つけた。
「喰らうかよ！」
すでにジークは次の動きを予想していて、バーニアを吹かし高く飛び上がっていた。
「これで終わりだ！」
ジークは剣に挟まったままの爪を降下の勢いを載せてその尾にたたきつけた。
ズシュウ・・・
爪は尾を切り飛ばし、そしてそのまま胴体に突き刺さった。
ブシャァアアア
どうやら心臓だったらしい。青い体液が勢い良く噴き上がり、ライデンをより青く染め上げた。
バタバタバタバタバタン・・・
足をばたつかせて痙攣し、そしてとうとうマザースコーピオンは絶命した。

「じいちゃん、エミリア！」
ジークはライデンから降りると横転したトラックのほうに駆け寄った。
すると、ディルがところどころ血を流して入るがエミリアに肩を貸しながら立っていた。
「じいちゃん！」
ディルはジークに親指を上に突き上げながら、
「やったな、ジーク！」
「ああ、じいちゃんもエミリアも無事でよかった。」
ジークも親指を上に突き上げて返す。
「終わったのね・・・。」
エミリアも弱々しくだがにっこりと笑った。
お互いの無事に安堵しているジークたちは突然、光に照らされた。
「な、何だ？」

上空を見ると４、５隻の飛空挺が飛んでいたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6994q/

トライルブレイザー　AC（Another Century）！

2011年6月16日22時29分発行